

平成29年度  
入学試験問題

国 語

2月2日 午前

受験番号	氏 名

中村中学校



□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字になおして答えなさい。

- (1) 木にヒリヨウを与える。
- (2) 狭い道をジヨコウして通る。
- (3) シュウシヨク活動を始める。
- (4) あの人ハセイジツなんだ。
- (5) ウンチンを計算する。
- (6) 熱帯のコウウ量が多い国。
- (7) タカラバコを見つける。
- (8) 自然ユタかな国。
- (9) 息をノむ美しき。
- (10) 液体がカタまる。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

\*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

適切な温度を得るための工夫は、冬だけではなく、夏にもとても

1

大切なことです。暑い夏、涼しさを得るためにはいろいろな工夫が  
されてきましたが、現在普及している方法は、エアコンによる冷  
房です。冷房は、家の断熱性や機密性を高めて内部を冷房し、あた  
たまった空気は A に捨てるというしくみです。都心部ではヒール※

5

トアイランド現象が起こっています。A 気とのつながりをシャツ  
トアウトして内部だけを涼しくするためにエネルギーを使う。エア  
コンの電力使用量の増加を解決するために、エネルギーの供給量を  
増やし、そのための技術開発として原子力発電所や新エネルギーの  
開発に邁進したり、エアコンの消費電力を少なくするための技術開  
発を行う。こうして考えると、B が浮き彫りになりま

10

す。そこに新たな提案ができるのは、生活の中から生まれる、「こ  
とここを結べば合理的な関係ができるんじゃないか」と感じる、  
暮らしのサイズにあったサイエンスです。高度な科学技術ではなく、  
生活する人のちよっとしたアイデアや工夫が力を発揮するかもしれ  
ません。

15

①※

寺田寅彦は随筆の中で、「涼しさ」に関する興味深い分析をして

ぶんせき

います。

「涼しさは瞬間の感覚である。持続すれば寒さに変わってしまう。

(中略) 涼しさは暑さとつめたさとが適当なる時間的空間的週期を

20

もって交代する時に生ずる感覚である(中略) 暑さがなければ涼し

さはない」(「涼味数題」『寺田寅彦随筆集第四巻』岩波文庫)

寅彦はこの分析を「自己流の定義」とも言っていますが、「涼しい」

ことから感じる快適さを言い当てているように思います。

環境共生型住宅を提唱する甲斐徹郎さんは、住居の快適な環境

25

について、わたしたちの体が感じる温度とはなにか、快適さはなに

かをわかりやすく説明しています。簡単に言うと、夏、閉めきって

クーラーで冷やす部屋が必ずしも快適とはいえない②いうことを、

とても「科学的」に考察しているのです。

わたしたちが「涼しい」と感じるのはどのようなときか、ちよっ

30

と思い出してみましよう。冷房で空気の温度を下げた部屋でしよ

うか? a 夏の暑い日、炎天下を歩いてきてクーラーの効い

た部屋に入ったときの一瞬は、「あー、すずしー」と声が出るほど

気持ちのいいものですが、それはほんのひとときのことです。しば

らく経つと寒くなってきて、体の芯まで冷えてしまうことも少なく

35

ありません。だからといって、冷房の設定温度を上げればよいので

しょうか。

夏の昼休み後、走り回ってきて席についてもなかなか汗が引きません。そんなとき、下敷きでぱたと顔や体を扇いで涼しさを感じていたときのことを思い出しませんか？ ぱたと手で扇いでも [b] 教室の気温が低くなるわけではないのに、確実に涼しくなっていたではありませんか。これは [c] 熱の移動なのです。

暑かったら扇ぐ。空気の流れをつくり、温度の移動を起こす。生実感として特に意識もせず取り入れてきた感覚なのに、ひとたびエアコンの温度設定のコントロールパネルを見るとそのことをすっかり忘れて、三〇℃では暑い、二八℃でも暑いと、どんどん温度設定を下げ、窓を閉め切った室内をつくっていませんでしたか。

暑い時期に部屋の中を冷房を使って [I]℃に下げたとしても、家の壁や窓ガラス、床、ベランダなどが [II]℃もあると、体感温度は [III]℃程度となり、設定温度 [I]℃でも涼しくもなく、快適

ではありません。暖められた外部の放射熱が、冷房をしている室内を暖めてしまうのです。たとえ、外の気温が三四℃でも、風があり熱の移動があれば、涼しく快適です。窓辺に植物などを置いておくと、外から吹いてくる風はもっと涼しくなります。気化熱の働きです。気化熱と放射熱を上手にコントロールするシステムを家のつくりにかかせば、エアコンに頼らなくてもほどよく快適な環境をつ

ることができます。このように熱のコントロールをするのに、科学の専門知識や研究室は必要ありません。

「放射熱」「気化熱」は、いずれも理科で習う初歩的な内容ですが、わたしたちはその知識を家の環境づくりには生かすことができずに、結局エアコンの技術革新に依存してしまっています。ほかにも学校で学んだ理科の身近な知識を暮らしに応用できる部分はたくさんあるはずですよ。

わたしたちが夏の涼しさを求めるのに依存しきっているエアコンですが、これは電気を利用した機械です。電気はとても便利なエネルギーですが、電気を使わなくても十分に役割を果たす道具はたくさんあります。むしろ、電気を使うよりもいい結果が得られることもあります。電化や自動化が本当に必要な部分、技術の革新が必要な部分とそうでない部分をよく見極める目を持つことが必要だと思います。

(佐倉統 古田ゆかり『おはようからおやすみまでの科学』)

※ヒートアイランド現象……都市部が周辺地域より高温になる現象。

※寺田寅彦……明治く昭和初期の物理学者。随筆家、俳人としても活躍した。

問一 ニカ所ある [A] に共通して入る漢字一字を答えなさい。

問五 [a] ㄱ [c] に入る語を次からそれぞれ選び、記号

問二 [B] に入れるのにふさわしい言葉を次から選び、記号

で答えなさい。

ア、エネルギー技術の未発達さ

イ、技術の方向のちぐはぐさ

ウ、日本の技術力のすばらしさ

エ、最近の夏の暑さの異常さ

オ、最近の夏の暑さの異常さ

ア、まさに イ、べつに ウ、すぐに エ、たしかに

問六 —— 線③「少なくともありません」を別の表現に言いかえた場

合、最も意味が近いものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、けっこうある

イ、ほとんどない

ウ、たまにある

エ、わずかにある

問三 —— 線①とありますが、寺田寅彦の「涼しさ」に対する分

析を次のようにまとめました。(1) ㄱ (4) に「暑さ」か

「寒さ」のいずれかを入れなさい。

問七 —— 線④「そのこと」が指し示す内容として適当なものを

次から一つ選び記号で答えなさい。

涼しさとは (1) から (2) への通過点の感覚であって、ずっ

と続くと (3) に変わる。涼しさは (4) があって初めて感じ

られる感覚である。

ア、熱の移動という専門知識

イ、エアコンは体によくはないこと

ウ、扇<sup>あお</sup>げば涼しくなること

問四 —— 線②「必ずしも」を使って「私は」あるいは「私が」

を主語にした例文を作りなさい。

問八    に入る数字を次からそれぞれ選び、記

号で答えなさい。(二カ所ある  には同じ数字が入ります。)

ア、二〇 イ、三〇 ウ、四〇

問九 本文中に出てきた次の語句のうち、筆者が今こそ大切にした

いと考えているものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア、生活する人のちよつとしたアイデアや工夫

イ、新エネルギーの開発

ウ、科学の専門知識

エ、気化熱の働き

オ、エアコンの技術革新

カ、理科の身近な知識

問十 夏を快適に過ごすためには家(部屋)の環境をどのように工

夫すればよいでしょう。本文の内容をふまえて答えなさい。

ただし、解答は「      」ではなく、「      」という形にすること。

問十一 次のア～オについて、本文の内容と合っていればAを、ま

ちがっていればBを解答らんに入力しなさい。

ア、下敷きであおいでも気温は下がらないので、涼しくはない。

イ、技術革新は今後ほとんど縮小の方向に進めるべきである。

ウ、先進の技術ではない、身近な知識を生かす余地はある。

エ、窓辺に植物を置くのは感覚的には涼しいが、科学的ではない。

オ、気温が下がらなくても熱の移動があれば涼しく感じられる。

〔三〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

\*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

主人公の「ぼく(伊山進)」は小学校五年生の時に、同じ団地に住む二つ年上の「浅尾広一」と友人になる。広一は、交通事故で父親を亡くし、自身も左腕をなくしていた。広一の母(友子さん)はジャズシンガーであり、広一もピアノを弾くなど、彼の家は音楽一家であった。広一は、ぼくの姉である「佳奈」とも仲良くなり、ひと夏を過ごしていた。

佳奈と広一くんがピアノを弾いている。まるで、一つ覚えのよう<sup>a</sup>なサマータイム。あの下手くその佳奈に、広一くんの伴奏が出来るのは、けがの功名だ<sup>b</sup>。ぼくがしょっちゅう口笛を吹いているから、サマータイムのメロディーを覚えてしまったんだ。

広一くんは、まるで生き返ったように、鍵盤をたたいていた。彼の中に光が戻った。本当にピアノが好きなんだと思う。それでも、ぼくが一番、広一くんの動かない左手を意識するのは、彼がピアノに向かっている時だ。

時間をかけて着がえをする時、さいふからお金を出す時、足で押さえてジュースの缶を開ける時、彼はどんな時でも、一人で右腕一

本で落ち着いてやってのけた。ぼくがちょっとでも手伝うそぶりを見せると、きっぱりと断った。

でも、ピアノは違うんだ。どんなに、両手で、お母さんのようにがん弾きたいだろうなと思ってしまうよ。左手の伴奏をつけてくれる人を、彼がどれほどしみじみと好きになってしまいか、わかるような気がした。

佳奈のやつ!

二人は **A** がびったりとは言いがたかった。やっぱり佳奈は下手くそだ。それでも広一くんは、めいっぱい楽しそうだった。佳奈も広一くんも、あんまり世界中で二人つきりって顔をしているもんだから、ぼくはだいたいじけてしまって、ベランダごし、道路の向こうのB-2の近くに咲いているキョウチクトウの群れを眺めた。毒々しいピンク。濃いピンク。佳奈のサンドレスと同じ、日差しに負けない強い色が、 **B** のくらむような輝きをはなっていた。

多少の予感があったけれど、ぼくはすっかり佳奈に広一くんを取られてしまった。二人は学校が違ったが、夕方や週末にちょこちょこ会っているみたいだった。なんと、自転車の特訓を始めたという。病院の隣の広い東公園の土の広場で、ぼくの自転車をを使って練習する。広一くんの自転車は、前に転んだ時、ハンドルがこわれてそ



のままになっていた。

① ぼくは一緒にいっしょに行かなかった。行っても良かったんだけど、やっぱり、ちょっと気がひけたんだよね。正直言って悔しかった。男のぼくより、佳奈なんかのほうがいいのかって。そんなに何回も会ったわけじゃないのに、ぼくはすっかり広一くんに魅かれていたんだ。

② ものすごく特別な人って感じがした。彼の内側の光にぼくは感電する。あの感情をいつわらない、ちょっとはにかんだ、カンの鋭い言葉がたまらなくいい。もちろん、腕のこと抜きで、広一くんを考えられなかったけれど、それがすべてじゃないんだ。

しょうがないな。姉弟だし、きっと似たようなこと思ってたんだ。佳奈は、十二歳だけど、女だし、やっぱ、ホレたんだろうな。よく、あっちこっち、すり傷をこさえて帰ってきた。あのすまじやの佳奈が、大事な服や顔をすっかり汚して、うれしそうに様子で帰ってくる。

——今日は調子が良かったわ。もうちょっとじゃないかなあ。でも、なんで、あんなにこわがるのかなあ。ほんと、あんた以下だわ。そんな風に自転車の特訓の話をぼくにした。

駆け足で秋は過ぎた。そして、あれは、十一月の中頃だったと思う。ぼくの自転車が見るも無残にがたがたにこわされてしまったんだ。犯人は佳奈だった。

【あ】 どんな風にぶっこわしたかは、いまだに白状しない。理由は一

言、あのイクジナシ！ きっと広一くんとけんかをしたんだ。もちろんぼくは怒った。両親は、もっと怒った。そして、その結果はというと、新品は買ってもらえず、佳奈の赤いチャリがぼくのところにまわってきたんだ！

【い】 ぼくは、【C】 立ちがおさまらないまま、広一くんを訪ねた。ろくでもないことになっている気がしたので、場合によったら謝らないといけなかった。でも、何度行っても会えない。いつも留守なんだ。ぼくは彼の電話番号を知らなかったが、意地でも佳奈に聞く気はおこらなかったね。そして、そのうち隣に住む叔母さんから、広一くんと友子さんが引っ越したことを聞いたんだ。

【う】 一ヶ月くらいして、広一くんから手紙が届いた。ぼく宛と佳奈宛の二通。それは、あっけないほど短い手紙で、友子さんのことも、佳奈や自転車のことも、何一つ触れてなかった。佳奈宛の手紙の内容は知らない。ぼくはやはり短い返事を出し、佳奈はついに何も書かなかったと思う。

【え】 それっきり、連絡はとだえ、彼のこと、彼の手のこと、プールやゼリーや自転車の思い出も、いつしか記憶の片隅みに薄れていった。ピアノの音だけが残った。ぼくは、ピアノ教室に通い始め、やがてヤル気のない姉を追い抜いた。それでも、ぼくはなぜ、柄にもな

てヤル気のない姉を追い抜いた。それでも、ぼくはなぜ、柄にもな

く、ピアノを弾き続けるのか、自分でもよくわかっていなかった。片手のピアノリストの姿は、もう頭がない。ただ、ぼくの体のどこかに、あの夏に刻まれた音が生きていたのだろうか。強いタッチの右手の和音。友子さんの嵐あらしのような酔よっぱらいプレイ。佳奈と広一ひろいちのちぐはぐな連弾れんだん、サマータイム。

75

「ぼく」は十七歳の高校生となり、ジャズ研究部に入っている。広一家とは連絡を取らなくなったものの、ピアノは続けていた。

八月。夏の終わり。

80

ブザーに答えたのは、佳奈だった。

「進！ お客さんっ」

玄関げんかんから、かん高い声で叫さけぶと、佳奈はそのまま外に出て行ってしまった。

ぼくはしばらく、その長身の青年がわからなかった。

85

「表札、変わっていないから、大丈夫だと思おぼって」

そう言って、照れたようににやっとした、その笑い方、目の光、頭の奥おくのピントとっせんが突然とつぜんびたりと合った。

その時の感情はえもいわれない。思わず、声こゑがうわずっていた。

「伊山くん、あんまり変わかわらないな」

90

☆

「そ、そうかな。……広一くんは、変わったなあ！」

ぼくは、まじまじと眺めまわしてしまった。初対面のプールの時と、そっくりの失礼な目つきでね。目のやり場に迷う、例のはにかんだ表情が、ぼくの胸を熱くした。

大学一年の彼は、家族と離はなれて、この近くに下宿していると言う。

95

「お母さん、元気？」

ぼくが聞くと、広一くんは、やはり、どことなくはにかんだ様子でにっこりした。

「うん。まじめに主婦しゅいやってる。オレ、妹が出来たよ。まだ、赤ちゃ

んだけど」

100

「……ああ結婚けっこんしたんだね！ 幸せ？」

「うん。なかなか……と思う」

微妙びみょうに間まのあく、とぎれとぎれの会話に笑ってしまった。なんだか照れ臭くさくてだめだ。昔むかしみたいに素直すなおに話せない気がする。佳奈はどこに行いったんだろうと思おもいながら、口にするのをためらった。

105

広一くんはぼつぼつと自分のことをしゃべりだした。主に大学の話だった。理工系の学校に行っている彼は、コンピュータのハードの研究に熱中ねんちゆうしていた。ぼくは適当ていとうにあいづちを打うっていたが、不得手ふでてな分野ぶんげんでよくわからない。相変あひわらず光ひかりの強い彼の目を見ながら、信じられないくらい大人おとなっぽくなったなとつくづく思った。も

110

ともと大人っぽい子供だったが、早くも本物の大人になってしまった。

ぼくは十九歳の浅尾広一にすっかりとまどった。昔話なんか持ち出す雰囲気じゃないんだ。ぼくはなつかしさにふるえながらも、彼の距離感をつかみかねていた。だから、なんだか、おそろおそろって感じて尋ねた。

「ピアノ、やってる？」

「ああ、そう言えば弾かないな」

広一くんはしごくあっさりと答えた。

その時の失望があまり深かったので、ぼくは広一くんの伴奏をするためにピアノを続けていたような気持ちになった。ぼくはジャズ研の話が出来なくなった。サマータイムを弾けるようになったことを言うのもやめた。何も簡単なことじゃないか。こう、言えばいいんだ。

——たまには弾いてみない？ 実は、ぼく、やってんだよな。ピアノ。ねえ、ちょっと、一緒に弾こうよ！

ぼくは、きつと、ひどく女々しい性格なんだと思う。それがわかっているから、おセンチに見られるのを、やたらと恐れるんじゃないかな。妙に格好をつけちゃうんだ。広一くんには部活のことを聞かれて、ぼくはスカした野郎になった。

「ちょっと、ジャズ、とかやってるけど……ピアノ」

最後につけ加えると、突然、まっかっかになってしまった。

「ああ」

広一くんの目が輝いた。

「君が！」

それは、心に深々と残るような言い方だった。意外、という驚きじゃなく、つまり、つまり、なんか、まるで……。うん、あんまり、おセンチなこと、言うのはやめるけど、でも彼は喜んだ。喜んだんだ！

「これは、母さんに言わないと」

広一くんは言った。

「もつと、うまくなったら、弾くから。君や君のお母さんに聴いてもらえるように、もつと練習して」

③ ぼくは言った。広一くんは大きくうなずいた。八月の太陽のように、明るい強いまなざしがまっすぐにぼくを見る。

「ああ、ぜひね。本当にね」

何かがつながった！ あの遠い日から今までの、すべての夏がピアノの音で数珠つなぎになった——そんな最高の感じがしたんだよ。

帰り際、玄関で広一くんは言った。

「お姉さんによろしく」

そこで、ぼくは尋ねた。



くは鼓動こどうが速すみくなった。乗る気だろうか。乗れるんだらうか。

広一くんがサドルにまたがる。ああ、乗る気だ。右手がハンドルを握にぎり直す。やっぱり乗れるんだ。そして、<sup>⑤</sup>彼は佳奈に何かを言った。

白いスカートの佳奈が荷台よこすわに横座りして、広一くんの背中をかかえた。あっと思う間もないすばやい動作だった。

二人乗りの自転車が軽々とスタートをきる。広一くんは、やや腰こしを浮うかしぎみに。ペダルをこいだ。車体は少しのぐらつきも見せない。ぼくは息をつめて見ていた。なかなか、あんなスマートなスタートは出来るもんじゃないって、思いながら。

後ろに佳奈という荷物を乗せて、右腕一本のハンドルさばきで、彼の自転車はぐんぐん加速していく。二つの車輪が八月の光をけちらした。彼等かれらの進む方向、B-12のキョウチクトウの垣根かきね。そのすさまじい桃色ももいろの中に赤い自転車は一気に溶とけていくようだ。

ぼくの頭の中でふいにピアノの音が踊り出した。

右手だけの力強いサマータイム！

(佐藤多佳子『サマータイム』)

※サマータイム……広一くんが「ぼく」に弾いてくれた曲。

問一 〜〜〜線 a・b の意味を次からそれぞれ一つ選び、記号で答

えなさい。

a 「一つ覚え」

ア、覚えた中で最も大切なこと

イ、なかなか覚えられないこと

ウ、軽々と物事を覚えてしまうこと

エ、そのことしか覚えていないこと

b 「けがの功名」

ア、良くないと思われたことが、偶然ぐうぜん良い結果を生むこと

イ、ありとあらゆる努力をして、物事を成しとげること

ウ、練習を積まなくとも、難しいことをやってのけること

エ、本来できることを隠かくして、いざという時に見せつけること

問二 A C に入る語の組み合わせとして正しいものを

次から一つ選び、記号で答えなさい。

A

B

C

ア、腕 目 毛

イ、腕 気 腹

ウ、息 目 腹

エ、息 気 毛

問三 —— 線①とありますが、この時の「ぼく」の気持ちを説明

したものとして適当なものを次から一つ選び、記号で答えな  
さい。

ア、佳奈に広一を取られてしまい、友人を失った悲しみを誰に

も言えず、気持ちが晴れないでいる。

イ、あこがれの広一が、自分よりも佳奈と仲良くすることに、

嫉妬しつとしつつも、二人の間に入りこめずにいる。

ウ、佳奈とばかり親しげに接する広一にいや気がさし、投げや

りな気持ちになっている。

エ、今まで広一を独占どくせんしてしまい、広一に対してはもちろん佳

奈に対しても申し訳なく思っている。

問四 —— 線②とありますが、これは「ぼく」のどのような様子

を表現していますか。適当なものを次から一つ選び、記号で  
答えなさい。

ア、広一の温かい雰囲気についての間にかつまれている様子。

イ、広一の人柄にほのかに思いを寄せている様子。

ウ、広一の内に秘めた魅力みりょくに強く引きつけられる様子。

エ、広一の大きな存在感を前に圧倒あつとつされている様子。

問五 この文章には次の一文がぬけています。この一文を入れる場

所として最も適切な場所を あ え から選び、記号で答え  
なさい。

あ　　というまに、すべてがささやかな夏の夢に変わって  
しまった。

問六 ☆の部分における、再会した「ぼく」と「広一」の二人の様

子について説明したものととして、適当なものを次から一つ選  
び、記号で答えなさい。

ア、久々の再会にお互い会話に困ってしまい、自然体ではいら  
れずに、恥ずかしさも手伝って言葉が続かない状況じょうきょうにある。

イ、過去の急な別れの原因を聞こうとする「ぼく」と、その原  
因を打ち明けようとする広一との間にはりつめた空気が流  
れている。

ウ、お互いたがに子どもの時の話はふれてはいけないと察し、当た  
りさわりのない話を続けていくうちに、会話の内容がなくな  
り、必死に内容を考えている。

エ、広一は自転車のことを謝ろうとしているがタイミングが探  
せずさぐにいて、「ぼく」は何のために広一が訪ねてきたのか  
探っている状況にある。

問七 ———— 線③とありますが、この時の二人の説明として適当な

ものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、広一は、「ぼく」がジャズをやっているのを聞き、かつて  
の思い出と重なって嬉しくうれ思っている。一方で「ぼく」は、  
広一に今までの練習の成果を見てもらえる良い機会だと気  
持ちをはずませている。

イ、広一は、やめていたジャズをふたたび始めるきっかけを得  
て気持ちを高たからせている。一方で「ぼく」は、広一にジャ  
ズの腕を認められたことで、より練習に励はげもうと決意して  
いる。

ウ、広一は、「ぼく」の言葉に対しジャズはそんなに甘いもの  
ではないと考え、快く思っていない。一方、「ぼく」は広  
一との失った時間を取り戻せることができると幸福感を得  
ている。

エ、広一は、「ぼく」がジャズをやっていると聞いて、嬉しさ  
でいっぱいになっている。一方、「ぼく」は、嬉しさと同  
時に、ピアノを続けてきてよかったという思いにひたつて  
いる。

問八 ——— 線④とありますが、「ぼく」がこのように感じた理由を四十字以内で説明しなさい。

問九 

X
---

 にあてはまる言葉を本文中より一語でぬき出しなさい。

問十 ——— 線⑤とありますが、「彼（広一）」が「佳奈」にかけて言葉としてふさわしい内容を考えて書きなさい。

問十一 問題文は「ぼくの頭の中でふいにピアノの音が踊り出した。右手だけの力強いサマータイム！」というように、印象的な表現で終わっています。その後の物語を、本文の流れを  
考えて、想像して書きなさい。



